Report

頭痛診療における トレーシングレポートの有用性

木嶋　保

キジマあたまのクリニック

はじめに

近年，CGRP（カルシトニン遺伝子関連ペプチド）関連抗体薬，ラスミディタンなど新薬の登場で頭痛治療は多様化し，医療機関では治療薬の選択，服用方法の説明等に多くの時間を費やしている．キジマあたまのクリニック（以下，当院）では頭痛診療の効率化の目的で，頭痛治療に特化した服薬情報提供書（トレーシングレポート：TR）を作成し，薬剤師と連携して運用している．今回，頭痛診療におけるTRの有用性について報告する．

TRは保険薬局で緊急性・即時性は低いものの患者の薬物療法に有用な情報を得た際に，処方医へその情報を伝えるためのツールである[1,2]．今までのTRは薬剤師が必要とする患者を決定し，独自で必要な指導を行なってきた[3]．対象は外来で抗がん薬を服用している患者が中心で，業務は服薬指導と残薬調整，ポリファーマシーの対策が行われてきた[4,5]．TRは薬剤師間では普及しつつあるが，医師からの認知度は低いのが現状である．今回，頭痛患者を対象としたTRを作成し運用したので報告する．

トレーシングレポートの運用

当院で作成した頭痛のTRは，北陸頭痛トレーシングレポート（Hokuriku Headache Tracing Report：HHTR）と名称した．運用方法を**図1**に示す．まず処方医はHHTRを作成する．HHTRの表面（**図2**）には薬剤師の聞き取りの時期（通常は2～3週間後）を記載し，該当する頭痛診断名をチェックする．服薬指導は代表的な項目をリストアップしており，患者ごとに必要な項目をチェックする．次に記載したHHTRを処方箋と一緒に患者に渡す．患者は処方箋とHHTRをもって保険薬局へ行く．HHTRを受け取った薬剤師はチェックされた服薬項目に基づき服薬指導を行う．その2～3週間後に電話などで薬剤師が患者に連絡を取り，TRの裏面の項目（頭痛薬の服薬状況，有用性のモニタリング）の聞き取り調査を行う．フリースペース

図1 北陸頭痛トレーシングレポートの運用方法